

四季節（フォーシーズン） 中編

入野 れん

<主な登場人物>

クリストフ・デルフィート：^{プレジデント}EFFO最高責任者。EFFO内の通称はプレジ。フランスの国会議員でもある

ルディアン・ライツ：EFFO幹部の一人。情報部長。通称チーフテン。今の国籍はスイス

ノエル・コルト：シャンソン・クラブの歌手。四季節前編でルディアン・ライツと結婚

ラヴレンティ＝スヴェルドローフ：駐仏ソ連大使館の書記官。ルディアンに無理やりEFFO幹部会に引っ張り込まれた。実はKGB（ソ連国家保安省）の少佐で、ゴルバチョフ書記長の最も若い側近。愛称はラーヴリャ

ミハイル＝ゴルバチョフ：ソ連最後の共産党書記長

トムスキー中佐：KGBの将校

ジダーノフ中将：KGB保守派の大立者。ゴルバチョフのペレストロイカ（改革）で立場が危うくなり、保守派を組織だてて対抗しようとしている

<用語説明>

EFFO：世界連邦設立機構。1982年、フランスの政治家クリストフ・デルフィートらが中心となって創設したNGO（非政府国際組織）。本部パリ

インペリアル・ルーム：EFFO本部ビル最上階の幹部会執務室の通称。幹部会メンバーを指すこともある

四月二六日

一九八六年四月二六日午前一時、ソビエト連邦ウクライナ共和国チェルノブイリ原子力発電所第四号炉で、一つの実験が再開された。これは停電時に、惰性で回転するタービンの力によって発電所の機能をまかなえることをテストすることを目的としていた。

実験の計画自体がずさんな上に、実験そのものもまともに行われなかった。実験の妨げになるからと、原子炉を自動停止させる警報装置も緊急冷却システムもあらかじめスイッチが切られていた。これらを含め、おおよそ「考えられない」ような重大なミスが六つも重なった。

さらに原子炉の設計ミスと建設時の規則違反によって、事故の規模は拡大した。その結果、出力は急激に上昇し、制御棒では抑えきれず、定格最大出力の一〇〇倍に達した。

燃料の約三〇パーセントが砕けて小片となり、炉心下部の水中に飛散。水蒸気が大量発生し、一回目の爆発が起こった。炉上部の重さ一〇〇〇トンの蓋がはずれ、全圧力管が切断され、制御棒が上へ飛び出した。二秒後、二回目の爆発。この化学性の爆発で破壊されたパイプから出た蒸気は、高温と圧力によって分解し、気体状の水素と酸素に分かれた。

スチールパイプに張られているジルコニウムが触媒の役割を果たし、水素―酸素爆発が起こった。巨大な鋼鉄とコンクリートの容

器の破片が宙に吹き飛んだ。発電所の屋根は持ち上がり、原子炉室に落下、プルトニウムや黒鉛の破片が外へ飛び散った。

黒鉛が燃えはじめ、やがて熱ガスの大旋風となり、周囲のものをすべてイオンにして吹き飛ばした。ランタン一四〇、ルテニウム一〇二、セシウム一三七、ヨウ素一三二、テルル一三二、ストロンチウム八九、イットリウム九一そしてプルトニウムとウラニウム——それら大量の放射性物質は煙の煤とともに、吹き上げられた。

その夜、発電所近郊にあるプリチャピ市の当直医だったベロコーニは、往診の帰り、チエルノブイリ発電所から二本の火柱が立つのを見た。午後二時の静まりかえった街のはずれの林ごしに、暗闇のなか、鮮やかな火柱が二つ噴き上がり、不吉に輝き続けていた。事故当時、チエルノブイリ上空には北西の強い風が吹いていた。火柱とともに八〇〇メートルの高さまで噴き上がった放射能は風にのり、白ロシア、ポーランド、北欧、そして北半球全域へと広がってゆくのである。

四月二十七日

四月二十七日、KGB(ソ連国家保安委員会)少佐、ラヴレンティイⅡスヴェルドローフはゴルバチョフ書記長の密命で、シチエルビナ副首相率いるチエルノブイリ原発事故調査団に加わり、現場を訪れた。総勢七名の調査団に各々の部下や連絡係などが付いている。今回、KGB捜査網を使つての情報収集は同行したアントノフ少佐が行い、国際特別調査局のラヴレンティイの任務は、事故の対外的影響を調査することにあつた。

車から降りると、そこは異様な光景だつた。コンクリート製の原子炉の屋根は吹っ飛び、

建材やコンクリートのかけらにまじつて黒鉛の塊がその辺に散らばつていた。放射能防護服の厚い生地のでいで身体が動かしにくい。炉の上部からは熱が放射され、空気がゆらめいていた。

「うるさい、止める！」

団長のシチエルビナ副首相が、スイッチを入れてからひっきりなしに鳴り続けているガイガーカウンターを止めさせた。

「現在の放射能はどれぐらいだ？」

「わかりません。測定器の針は振り切れたままです」同行した発電所の技師が答えた。発電所の煙突は焼けて真っ赤になつていた。

「こいつはまあ……しかし思ったほどでもないですな」

「なんだと？」

ラヴレンティイは、部下のイーゴリーⅡポノマリョフを振り返つた。

「いや、この辺ぜんぶ、ぶつつぶれているのかと思つたのでね。町一つきれいになつたヒロシマのように」

イーゴリーはラヴレンティイより三歳年上の三十二だが、赤い髭とよすぎる体格のせいでゆうに二十は老けて見られていた。

「不謹慎だぞ、イーゴリー」

「いや、少佐、ことによるとそうなる可能性もあるのだ」

シチエルビナ副首相が二人のそばに来ていた。

「すると…炉心融解が起これば……」ラヴレンティイの脳裏に、モスクワからの飛行機の中で詰め込んだ、原子力発電所の事故に関する即席知識がよみがえつた。

「大規模な放射能汚染が広がる。建物が破壊されなくとも、放射能のせいで生き物は死に、一帯は死の街となるかもしれん」

「中性子爆弾の原理ですね」

ラヴレンティはうなづいた。

上空ではヘリコプターが砂や鉛、粘土などをまだくすぶり続けている。炉心めがけて投下していた。一回で運べる量はたかがしれており、作業員たちは袋を一つづつへりに積んでは手で放り落としている。

「まるで象に向かって小銃を撃つとるようだな」副首相はつぶやいた。

「なぜ、彼らは防護服を着ていないんだ」

調査団の一人が、その作業員たちを指さして言った。プリチャピ市の共産党書記は困ったような顔をした。

「は、おそらく防護服の数が足りないものと思われます」と言い訳した。

「放射能が高く、これ以上ここにいるのは危険です。プリチャピ市に戻りましょう」

「防護服も付けずに作業している者は危険ではないのか？」副首相は書記に厳しいまなざしを向けた。

「市内に着いたら、直ちにこれを彼らに渡したまえ」

副首相はそう言って、自分たちの防護服を指し示した。

四月二十七日 二

「諸君に一つ聞きたい。何だ、この有様は！なぜ市民に避難命令を出さなかった！」

チェルノブイリ原子力発電所の城下町、プリチャピ市の共産党市部の一室にシチェルビナ副首相の声が響き渡った。会議室の調査団員、ウクライナ共和国内務省、プリチャピ市共産党、チェルノブイリ原子力発電所の幹部らは、いっせいに副首相の指さす窓の外を見た。窓の下の大通りには人々が行きかい、

子どもたちが走りまわっている。

「は、それは……我々だけでは判断しかねる重大事項でしたので……」

プリチャピ市共産党書記はしどろもどろに言いかけた。

「では私が命令する。ただちに市民の避難にかかれ！三時間以内だ！」

副首相は語気を強めながらドアを指さし、プリチャピ市の党書記はあたふたと部屋を出て行った。副首相はテーブルに向き直った。

「では当面の最大の問題にかかろう。こうしている間にも放出され続けている放射能を防ぐために、我々は何をせねばならないのだ？」

「まず、炉心の火を完全に消す必要があります。砂や鉛、中性子を吸収するボロンカーバイトなどを上空から投入し続けます」

プリチャピ市の消火活動の責任者が答えた。

「だが、そのためには何十トンも投入しなきゃならんぞ。炉心はその重さに耐えられるのかね？下の冷却水の中に落ちたら大規模な水蒸気爆発が起きるぞ」

モスクワの原子力研究所から派遣されたレガソフ副所長が口をはさんだ。「それになまじ炉心を覆ってしまうと、内部に熱がこもり、炉心融解が始まるかもしれん」

炉心融解とは、事故によって核反応が暴走し、アメリカでこれが起これば発生したあまりの高温で地球が解け続け、ついには中国に達する「チャイナ・シンドローム」（実際にはアメリカの反対側は中国ではないが）として恐れられた現象である。一九七九年のスリーマイル島の事故では幸い、炉心融解は起こらなかったが、ここで自分たちが対応を誤れば世界で最初の炉心融解を引き起こす事態になりかねなかった。

「だが、ほうっておくわけにはいかん。このまま放射能を止められなければ、キエフやミンスクに人が住めなくなる」

「我が国の技術だけでは限界があります。西側の応援を頼まないとい……」

シチュエルビナ副首相はラヴレンティイの方を向いた。ラヴレンティイは黙ってうなづいた。

四月二十七日 三

モスクワ、クレムリンのソ連邦最高幹部会館の一室で、ラヴレンティイ・スヴェルドローフ少佐は、がっちりした肩に灰色の髪に覆われた頭をかたむけ、窓の下を見やっていた。深夜だがクレムリン周辺は光に満ちていた。一四世紀、ドミトリー大公によって築か

れた石の城壁^{クレムリン}は、歴代の皇帝の居城となり、一九一七年のロシア革命後はソ連政府の主要機関と要人の邸宅が集まるモスクワの中心である。

歴史的な建造物を見に来るソ連全土や外国からの観光客も今の時間はとだえ、クレムリン内の石畳の道を通るのは、緊急呼び出しを受け、公用車で駆けつける共産党幹部とそれを出迎える職員や警備員たちぐらいだ。

——まだ放射能について何も知らぬ人々。

「少佐、ルディアン・ライツ氏が到着しました」

ラヴレンティイは窓から視線を上げ、振り返った。

「すぐここへ通せ。書記長にも彼の到着を知らせろ」

「はっ」

アゼルバイジャン出身のトルコ系の部下はドアから姿を消し、しばらくして黒髪の若い男を連れて戻ってきた。

「ルディアン」

「ラーヴリヤ！」

二人は同時に相手の名を呼んだ。

「状況は？」

挨拶もそこそこに、ルディアンは尋ねた。

「とにかくひどい。四号炉は壊滅状態だ。放射能も大分漏れている。なにしろ炉心部の黒煙が建物の外に散らばっているんだ」

「現場へ行ったのか？」

「さっき戻ったところだ」

「被害の程度は？ どれぐらいの放射能が漏れたんだ？」

「わからん。これだけ大規模な原発事故は世界でも初めてだ。放射能の方も、測定器の針は振り切れたままで、何キュリーなのかわからない」

ルディアンは一瞬、絶句した。

「ラーヴリヤ、そんなところに行ったのか？」

「シチュエルビナ副首相の調査団としてだ。副首相も現場に入った。我々は発電所の間近まで行った」

「…安全対策に問題があるな」

ルディアンは二つ年上の友人を見つめた。ラヴレンティイは、首を振った。

「西側の感覚で考えないでくれ。ここはソ連だ」

「死者は？」

「今のところ二人。だがこれからどんどん増えると思う。……そして放射能は数日中に西ヨーロッパに達するだろう」

ルディアンが何か言いかけたとき、ドアがノックされ、トルコ系の部下が顔を出した。

「書記長がお二人をお呼びです」

「わかった」

ゴルバチョフ書記長の最も若い側近は立ち上がった。

「書記長は今、主な政治局員たちと対策を練っている。おまえには主に西側との関係で聞きたいのだと思う」

ラヴレンティはルディアンを促して、古めかしい装飾の廊下に出た。ところどころで警備兵が警戒にあたっている。

「……三年前を思い出すな」ルディアンが行った。

「ああ」

ラヴレンティはドアの一つの前で止まり、警備兵にうなづくとノックした。

「スヴェルドローフです」

「入れ」

二人は秘密会議用の小ぢんまりした一室に入った。ルディアンとこの部屋に入るのは三年ぶり、二度目だった。一九八三年一月、NATO（北大西洋条約機構）の核戦争を想定した軍事演習を、クレムリンは本物の核戦争と思いきんでソ連中枢部がパニックに陥っていた時のことである。

あの当時ラヴレンティは少佐になる前で、ルディアンのSIS（英国情報部）の情報部員から独立して間もなかった。あれからラヴレンティは少佐に昇進し、ルディアンはEFFO（世界連邦設立機構）の情報部長を兼ねながらスイスに情報分析のコンサルティング会社をつくり、現在に至っている。

ゴルバチョフと二人の関係はこのとき以来のもので、アンドロポフ書記長が死去し、チェルネンコが後を継いでモスクワの空気が保守派優勢になり、ラヴレンティはアンドロポフ派の上司の計らいでフランス大使館勤務となった。しかしチェルネンコは一月月であっけなく病死した。政治局会議で接戦の末、書記長に就任したゴルバチョフは、旧知のラヴレンティにスヴェルドローフを彼の最も若い側近にしたのである。

一方ルディアンは、以来何かあるたびゴルバチョフに呼び出され、実質的にはゴルバチョフの西側情勢コンサルタントと化している。もちろんルディアンにはペレストロイカ（改革）の情報を真つ先に知らせるなどの形で、その働きに報いているわけだが。

——今の政治局員たちの顔ぶれの中で、三年前と同じ顔はゴルバチョフ書記長一人だけだ。ゴルバチョフ書記長は就任以来、政治局員を次々入れ替え、着々と基盤固めを進めていた。

ゴルバチョフはラヴレンティとルディアンに椅子を指し、政治局員たちに向き直った。

「諸君、^{ガスパージン・ルディアン・ラツ}ルディアン・ライツ氏だ」

居並ぶのは、シエワルナゼ外相、書記長の右腕ヤコブレフ政治局員、党内ナンバー2のリガチョフ、レイシコフ首相、ドブルーニン前駐米大使らおなじみの顔ぶれだ。ゴルバチョフ書記長は言葉が続けた。

「さて、ガスパージン・ライツ、スヴェルドローフ少佐から概要は聞いたと思うが、二六日未明、チェルノブイリ原子力発電所で大事故が起こった。我々にとって、いや世界でもこのような事故は初めてだ。事故の規模は我々の予想をはるかに上回っており、現在も必死に処理活動が行われているが、率直に言っておいて我々は西側の技術と協力を必要としている。さまざまなルートで協力を要請するが、原子力発電は軍事技術と深い関係があり、全面的な協力をすぐに得るのは難しいことが予測される。そこで、君に迅速に実効性のある協力のために尽力してほしいのだが」

ルディアンは書記長の言葉をじつと聞き入っていたが、ゆっくり口を開いた。

「お引き受けする前に、一つうかがいたいことがあります。事故発生から二日もたつて

いるのにソ連国営タス通信が何も報じていないのは何故ですか」

「それは……君もわかるだろう、このような大事件を詳細が不明なままに情報を国民に知らせればパニックが起こるに違いない」

「百歩譲って、ソ連国民に対する情報を管理する権利があなた方にあるとしても、西側諸国、特にヨーロッパ諸国は納得しないでしょう。自分たちのところにどれだけの放射能が降ってくるかもわからぬままに、協力だけ頼むと言われても、手の打ちようがありません」

「ガスパージン・ライツ、我々は情報を全く提供しないとやっているわけではない。ただ、明確でないままに無責任な流言を流布させたくないのだ」

ゴルバチョフ書記長が言った。

「情報がまったくシャットアウトできるな

ら別かもしませんが、グラスノステ情報公開も始まって

いるおり、それは無理です。西ヨーロッパで放射能が検出されれば、いずれわかることです。あなた方が情報を出そうと出すまいと、西側のマスコミはあることないこと書きたるでしよう。それこそ無責任に。サハリン沖に沈んだKAL機事件の時のように」

部屋の中の全員の脳裏に、世界中がソ連を避難した三年前の悪夢の二週間がよみがえった。

「ガスパージン・ライツ、だが我々はソ連国民に対して責任を負っているのだ。限られた道路に人々が集中すれば、交通事故の被害者だけで事故の死者を上回るかもしれない」ヤコブレフ政治局員が発言した。

「しかし、選択の余地はありません。ブレジネフ時代でさえ、ソ連市民は西側のラジオを聞き、ロコミで情報を伝えました」

ルディアンの額にうつすら汗がにじんでる。だが、クレムリンのお偉方は、このせいぜい二十歳そこそこしか見えない（実際の年齢は二六だ）黒髪で童顔の外国人の口元に注目していた。

「確かに放射能は理解するのが難しく、被害が明確でないやっかいなしろものです。ですが、それをあいまいな情報で封じてしまうのは、かえて不安と政府への不信をかりたてるでしょう。そして人々は西側の無責任な報道に跳びつくのです」

こいつは本当に西側の人間なのか、とラヴレンティイは思った。政治局員たちも同じように驚いているのがわかる。

「…我々はどうするのが最適と考えるかね？」

今まで黙っていたルイシコフ首相が聞いた。

「できるだけ多くの情報を系統立てたうえで、IAEA（国際原子力機関）および、個別に技術や協力を受けたい国の政府に、公式レベル、非公式レベルで知らせます。同時に、テレビや新聞でも情報を流します」

「IAEAや各国政府は、素直に技術を提供するだろうか」

リガチョフ政治局員が聞いた。原子力発電は核兵器とつながる微妙な高度技術である。西側諸国は軍事技術に関連しそうなものはコム（対共産圏輸出統制委員会）でのききみ、規制していた。

「やり方次第ですが、特に今回は対応を誤れば西側各国にも大きな被害が出るのですから、協力しないことはないでしょう。ただ、技術的な面から言ってもある程度の情報を伝えなければ、処置の方法がわからず、協力もままならないのですが」

「協力してくれる専門機関にはきちんとし

た情報を伝える。だが、一般に流すのは慎重にすべきだ」

「しかし判断は国民自身で行うべきです。それは皆の権利です」

「ここは西側ではないのだ、ガスパー・ジン」
リガチョフ政治局員はラヴレンティイと同じことを言った。「我々は確かに情報公開を始めている。だが国民は、自分たちで情報を選択し、判断する訓練がまだまだ足りない。彼らにあいまいなまま重大な情報を与えて恐怖に陥れるより、我々が責任をもって管理すべきではないかね」

「しかし……！」
ラヴレンティイが政治局員たちに気づかれぬようにルディアンのはじをつかんだ。ゴルバチョフ書記長が話を遮った。

「諸君、話を最初に戻そう。こうしている間にも第四号炉から放射能の放出が続いているのだ。これを閉じ込め、炉心融解を防がねばならない。早く食い止めなければ、核ミサイル一つ、二つ分の放射能が周辺に散らばる。これは戦争と変わらないのだ。ガスパー・ジン・ライツ、我々は君の協力を必要としているのだが」

「——承知しました」

書記長は満足そうにうなづいた。まだルディアン・ライツに質問したような政治局員たちをさえぎり、ゴルバチョフは、

「では、詳しいことはスヴェルドロフ少佐に聞いてくれたまえ」

と言って、ラヴレンティイに合図した。ラヴレンティイとルディアンは、簡単に挨拶して部屋を辞した。

「ふう」

廊下でルディアンは額の汗をぬぐった。ハンカチを探すが出てこない。ラヴレンティイは自分のハンカチを差し出した。

「大変だったな」

「残念だ。説得しきれなかった」

「あれ以上は無理だ。お偉方も伊達に何十年も共産黨員をやってきたわけじゃない。二十代の若造に、十分や十五分で価値観を変えさせるほど柔らかくはない」

「ラーヴリヤもまあ……、場所をわきまえろよ」

ルディアンは、いつものくつろいだ調子で、廊下の端々に入る警備員を示した。そんなものの気にするか、といった表情でチラッと振り返ったラヴレンティイだが、厳しい表情になつて言った。

「いったん、KGB本部に来てくれ。新しい連絡が入っているだろう」

「わかった」

そう、これは戦争なのだ。核エネルギーと、放射能と、官僚主義や無責任さのかたちで無秩序に動く人間のエゴイズムとの戦争なのだ。

四月そして五月

それから二週間、ルディアンはパリの新妻のところへ帰れなかった。モスクワからロンドンに飛び、ウィーンのIAEA（国際原子力機関）の本部に行ったかと思うと西ドイツのロボット工場に向き、その足で広島の医者に会いに行った。

ソ連政府の発表の遅さにルディアンは業を煮やし、これ以上延ばすなら協力を断る、と駄々をこねて、その権限のないラヴレンティイを困らせた。ルディアンをさんざん怒らせた公式発表は事故発生から六十八時間たった四月二十八日二十一時（モスクワ時間）、タス通信が伝えた。

同じ日の朝にはスウェーデンで放射能が

検出され、それから西ヨーロッパはハチの巢をつついたような騒ぎになり、マスメディアはチエルノブイリのニュースで埋め尽くされた。情報の正確さを確認してから流すソ連当局の慎重な姿勢は、正誤入り混じった山のような情報をもって情勢を判断する西側の目には「秘密主義」として映り、量的に足りない情報を補うため噂話を記事にした結果、死者二千人説まで出た。

五月一日、炉心からの放射能放出がふたたび増えだした。それは六日の深夜、キエフ軍管区の軍人たちの「英雄的な」活躍によって、炉心下部の水を抜き、爆発の危険はひとまず収まった。

五月二日にはルイシコフ首相とリガチョフ政治局員が現地を視察し、遅々として進まない官僚たちの対応に活を入れた。

燃料の融解が進み圧力容器・格納容器の外に漏出するメルトスルーの危険がなくなつた後も、チエルノブイリでは軍人たちが試行錯誤を繰り返して、途中からは外国の技術指導を受けながら、砂やセメントを現場に落とし続け、ついにはコンクリートで発電所そのものを覆った。

それは「石棺」と呼ばれ、放射能を封じ込めるために、今後数百年にわたってコンクリートが塗り重ねられてゆくことになる。

六月

「中佐に昇進するって？」
パリ、バレンヌ街のアパートのドアを閉めながら、ルディアンが言った。

「まだ正式決定じゃないがな。チエルノブイリがメルトスルーしなかった、祝いだとさ」

ラヴレンティイが答えた。ラヴレンティイやル

ディアンを含めた皆の必死の努力の甲斐あって、チエルノブイリ原発事故は最悪の事態——メルトスルーを免れた。ようやく事故処理に一区切りつけて特別任務を解かれたラヴレンティイは、パリのソ連大使館に戻ってきたのである。

「ルディ、お客様なの？」

今のドアが開いて、ルディアンの妻、ノエルが顔を出した。部屋着の上にガウンを羽織っている。

「ラーヴリヤだよ。今晚、泊まる」

「^{ボンソワ}こんばんは」ラヴレンティイはノエルの頬に軽くキスした。

「僕がするから、君は寝てて」

何か出そうかと言ったノエルをルディアンがとめ、彼女は「どうぞごゆっくり」と声をかけて部屋に戻った。

「彼女、今日は仕事は休みなのか？」

ラヴレンティイが聞いた。ルディアンが結婚する前から何度も、彼はノエルが歌う店^{ソウラ}でルディアンと会っていた。

「ちよつと具合を悪くしていてね。大事をとって休んでいる。その辺に座っててくれ」

そう言ってキッチンに入り、コニヤックとグラスをもって戻ってきた。

「ノエルに大分、罵られたよ」

「あん？」ラヴレンティイはグラスに口をつけたまま声を発した。

「チエルノブイリだよ。この騒ぎは何だつてさ。ろくな情報もなくパニック状態だ」ルディアンはそう言って、床のクッションの上に座った。

「ルディアン、おまえ結婚してから雰囲気が変わったな」

「そうか？」

ルディアンはラヴレンティイを見上げて微笑した。

「まあ、人の親になるとなれば多少は……」
「……！ そいつはおめでとう。ということは、あの結婚は……」言いかけて、ラヴレンティイは気が付き、口を閉ざした。

「世間ではよくあることだ」ルディアンはかまわない、といったように唇の端をちよつと上げて笑って見せた。

「まあ、おまえらしくない即断だと思った。いつ生まれるんだ？」

「七月だよ。…ラヴリーヤには言えるのに、どうしてデルフィートには言えないんだか」

「デルフィートに言っていないのか？」

「ああ」

ルディアンがナンバー2を務めるEFFO（世界連邦設立機構）のナンバー1がクリストフ・デルフィートで、ルディアンとも家族同様に親しい。ちなみにラヴレンティイも数カ月前からゴルバチョフの黙認のもと、EFFO幹部会入りしている。

「いずれわかることだぞ」

「そうは思うんだが……ここのところデルフィートの機嫌が悪くて」

ラヴレンティイはグラスの中身を一口飲んだ。

「結婚式にデルフィートを呼ばなかったって？」

「ああ。でもラヴリーヤだつて出なかったろ。二人だけで式を挙げたんだ」

「それはちゃんと説明したのか？」

「まだ言っていない。だからデルフィートの機嫌がずつと悪くてさ。結婚以来、ゆっくり話したこともほとんどなくて……」

「もう五カ月だぜ。何やってたんだ」

「仕事であつちこつちに行つてた。カイロとかシンガポールとかモスクワとか……」

「妊娠した妻をほっておいてか？」

「うん」

子どものように立て膝をしてグラスを傾けるルディアンを見ながら、ラヴレンティイは何となくデルフィートに同情したくなってきた。よくこんなもののボスをやってられるものだ。勘が鋭くて、頭が切れて無茶苦茶やって最後にはすごい成果をあげるくせに、妙に弱気で手間がかかる……。

だがその後、話題がチェルノブイリになったとき、ともすれば感情的になったのはラヴレンティイの方だった。

「消防士たちは、溶けた屋根に足をとられながら消火した。その屋根の材料は十年前に使用を禁止されていたのに、なぜそんなものが使われていたかといえば、倉庫に余っていたからだ。消防士たちはいつもの消防服しか着ていなかった。規則ではあるはずの放射能防護服は、発電所にも消防署にもなかった」

ルディアンはグラスを傾けながら黙って聞いている。

「俺がモスクワを立つ時も、作業員たちはガーゼのマスク一つで現場にいた。彼らのうちからも死者が大勢、出るだろう。イギリスから防護服が届いたのはつい先日だ」

この数週間、ラヴレンティイの積りに積もった想いが堰を切つてあふれ出た。

「ヒロシマ、ナガサキ以来の大惨事だ。今までの死者は三十一名だ。だが、あんなわずかな作業では、この先何人出るかわからない。そしてこれから何十年かの間に、ウクライナ、白ロシアとヨーロッパで、何千、何万という人間が癌で死ぬんだ。チェルノブイリのせいだ！」

その一人は、大量の放射能を浴びたラヴリーヤかもしれない。グラスを口からはなしてルディアンが云った。

「結局これはさ、皆、同じなんだな。目の前の便利さや惰性より、全体を見たうえで自ら不自由に我慢できるかどうか。環境破壊も、原子力も」

「E F F Oの、口に出してはいけない目的」
ラヴレンティイがにやつと笑って指さした。

「わっ、やめろ！」

「地球の未来と平和のために♪」

「やめないとコニヤックぶっかけるぞ」

「それに命かけているくせに」

「人のこと言えた義理か。ラーヴリヤこそペレストロイカに……」

二人が挨拶を交わして眠りについたのは、夜明けちかくなつてからのことだった。

八月 一

モスクワ、クレムリンから五〇〇メートルほど離れたところにあるK G B本部のジダーノフ中将の執務室に、一人の来客があった。

「書記長は一体、ソ連邦を潰すつもりなのか」

汎カルパト軍管区司令官、イヴァンIIパブロフ將軍は腕をふるわせた。

「すっかり西側の思想にかぶれおつて。今まで我々が死ぬ思いで守ってきたものを何だと考えているのか……」

K G B第八管理局の局長を長年務めたジダーノフ中将が相槌をうつ。「アフガニスタンの方はどんな具合です」

「書記長の腹は撤退で固まっている。まったく、今までつぎ込んできた資材と人員をどぶに捨てるともりだ」七十を超えたパブロフ將軍は怒りをあらわにして続けた。

「今まで我々は核戦争を避けつつ、軍事力の誇示によって、ソ連邦の権威を高めてきた。そうとも。フルシチョフが豪語したG N Pで

アメリカを抜くという夢は遠ざかるばかりだが、共産主義イデオロギーと軍事力こそがソ連邦をアメリカと並ぶ超大国の地位に押し上げたのだ。それをソ連邦から取ったら、一体何が残るのだ！ だだっぴろいだけの三級国家になり下がれというのか！」

パブロフ將軍は息を切らせ、コップの水をのどに流し込んだ。

「とにかく急がないと時間がありません。書記長が就任して一年あまりの間に、政治局でもK G Bでも同志たちの首切りが相次いでおります」

ジダーノフ中将の部下、トムスキー中佐がなめらかに口をはさんだ。

「それだ。軍でもゴルシコフ、軍検察のゴルヌイ、政治本部長のイエーピン、ゴリドベルク、みなゴルバチョフになつてから辞めた。あいつは軍事費を半分にするなどとほざいておるが、五〇〇万人のソ連軍を路頭に迷わす気か！ 軍によって厳しく統制せねばこの広い国土の秩序が保たれるわけがない！」

パブロフ將軍は頭頂にわずかに残つた白髪に湯気を立てて怒つた。

「ゴルバチョフは、我が国をめちやくちやにする」ジダーノフ中将は腹の底に響く、鋭い声で云つた。

「貴官がゴルバチョフに手を打つというのなら、協力は惜しまぬ」パブロフ將軍は冷静さを取り戻しながら尋ねた。

「追い落とすのか？」
「いや、合法的に降ろすには時間がかかりすぎる」

この半年のうちに、ゴルバチョフと自分たちの力関係は完全に逆転していた。時間とともにゴルバチョフは確実に基盤を固めていた。

「ゴルバチョフの身边は、三月に黒海で書

記長暗殺をたくらんだ者のせいで、警戒が一段と厳しくなっています」

ジダーノフ中将の言葉を、トムスキー中佐が継いだ。

「失敗した直接の原因はスヴェルドローフというKGBの一将校です。まず、そちらから手を打つ必要があるかと」

「不祥事を起こさせるか」
パブロフ将軍が聞いた。

「いや、スヴェルドローフはゴルバチョフの『お気に入り』だ。少々のことでは奴がもみ消してしまいうだろう。片すしかない」ジダーノフ中将の言葉は冷たかった。

「…陰謀はそちらの専門だ。まかせよう」
戦場でしか人を殺したことの無いパブロフ将軍は、少し不快そうに云った。

「それで、人員を借りたいのだが。最近、我々に対する監視が厳しくなっていて、KGBの人間を使うのは危険が大きすぎるのだ」
反ゴルバチョフ派を集めた「ペレストロイカ推進会議」は名前の威力も当てにならず、その面々にも内部調査の手が伸びていた。

「承知した」
老将軍はうなづいた。計画の説明を受けたパブロフ将軍が部屋を辞したのは、それから一時間後のことだった。

パブロフ将軍の乗る公用車^ジが、ジェルジンスキー広場から去るのを見届けて、トムスキー中佐は口を開いた。

「中将、一つ質問があるのですが」
「何だ」

「ゴルバチョフを直接的手段で片づけたとして、次に書記長の座に就くのはおそろしく、党政政治局のイデオロギー担当となったエゴール・リガチョフです。チェルネンコ前書記長が死去した際、ゴルバチョフと書記長の座

を争ったグリシン同志はすでに年金生活者になっていきますし、政治局内でゴルバチョフの息がかかっているのは、クナエフ、ソロメンツェフ、シチエルビスキー政治局員の三人だけで、この三人で政治局をひっくり返すのは至難のわざです。危険を冒してゴルバチョフからリガチョフに変えても、我々に大きなメリットはないように思うのですが」

「いや、リガチョフでもいいのだ、中佐」
ジダーノフ中将は椅子を半回転して、中佐のほうへ向きなおった。

「我々が問題にしているのは、ゴルバチョフの過激なまでの転換だ。非現実的な夢物語のために、その影響も考えず、今の体制をぶちこわそうとしておる。リガチョフ政治局員はマルクスレーニン主義を守り、党の重要性、国家の役割を認識している常識派だ。ゴルバチョフに比べればな」

「は…」
ジダーノフ中将の自信にあふれたさまを見て、トムスキー中佐はこれ以上議論するのはムダと思い、それで挨拶して自分のオフィスにもどった。だが彼は、今ひとつ釈然としない思いをかかえていた。

トムスキー中佐は、ゴルバチョフがつい最近、ナンバー2に引き上げたリガチョフ政治局員が共産党の組織・党活動部部长であった頃から知っていたが、リガチョフの書記長就任が自分たちにとって、より都合のよい状況とは思えなかった。むしろ今より悪くなる可能性が高かった。

リガチョフのあの、いったん始めたことを断固として貫き通す頑強な精神は、ゴルバチョフ書記長にまさるものがあった。彼はブレジネフの官僚たちの腐敗した惰性を露骨に嫌い、腐った官僚主義といわれなき特権がソ連邦を食いつぶすと、あからさまに非難した。

物事に筋を通そうとするあまり、今まで何度も党内で摩擦を引き起こしていたが、ゴルバチョフはリガチョフのそういった面を評価したにちがいない。

以前、故ブレジネフ書記長が自分の一族を党中央委員に入れようとしたとき、リガチョフは断固として反対し、ついにはアンドロポフ政治局員が中に立って、一族の男に中央委員を諦めさせ、別のポストをあてがったことがあった。そのリガチョフが旧ブレジネフ派に属する自分たちのために便宜を図ると考えるほど、トムスキー中佐は楽観主義者ではなかった。

トムスキー中佐はマルクスレーニン主義の将来など、どうでもよかった。

スヴェルドローフを片づけるのに失敗すれば、退役なら恩の字、ヘタをすれば裁判にかかって監獄行きだ。自分がスヴェルドローフなら、この機会を捉え、保守派の自分たちを壊滅させようとするだろう。

この危ない橋を渡るのには割に合わない。かといって今さら、ジダーノフ將軍のもとを去るのも危険が大きかった。

しばらく思案の末、トムスキー中佐は部下を呼んだ。

「何でしょうか、中佐」

「パリの部員に無記名の電報を打つよう連絡してくれ。電文は……」

八月 二

ラヴレンティがしばらくパリを離れると、このため、ルディアンは朝、低血圧を押してベッドを抜け出し、待ち合わせのブローニエの森のシャイヨー門へ行った。

寝不足の目に朝日が見える。ラヴレンティは先に来ていた。

「よう、ルディ。眠そうだな」

「そっちは相変わらず早起きで」寝起きのルディアンは不機嫌さを隠そうともしなかった。おまけに頭痛がする。

「早起き？ もう七時だぜ」ラヴレンティは腕時計を見て言った。

「しばらくパリにこないって？」

ルディアンが聞いた。

「ああ。やっと休暇が取れたんだ。書記長も黒海に行ったし。十一月の米ソ首脳会談の行方次第で、新年に家に帰れるかどうかかわらないからな」

ラヴレンティの亡くなった父親はポーランド系で、ポーランド国境に近いリボフがラヴレンティの故郷だった。

「ふーん、リボフへ帰るのか」

「ああ。おまえは夏のバカンス、どうしたんだ？」

「しばらく赤ん坊シエロードを連れてノエルの実家に行つて……それなんだが、実はシエロードは僕の子どもじゃなかったんだ」

「へ？」ルディアンの唐突なもの言いにラヴレンティは間の抜けた声を上げた。ルディアンの妻、ノエルは七月に男の子を生み、シエロードと名づけられていた。

「……つまり、いやプロポーズしたときからそうかもしれないのはわかっていたけれど、ノエルは僕の子どもでもないことは始めから知っていたそうさ。シエロードは僕と出会った前からみごもっていたし、僕はそれを承知の上で彼女と結婚したんだと……」

ルディアンは混乱し、とりとめのない説明をさらに続けようとした。事情をさとしたラヴレンティは一言、いった。

「ドジな奴」

「ラ、ラーヴリヤ！」

ルディアンは滅多になく感情的に叫んだ。
「友人だろ、もつと真面目に聞けっ」

ほのかに秋を感じる、朝のブローニユの森
針葉樹と広葉樹、常緑樹と落葉樹。穏やかな
風はあくまでさわやかで心地よい。

「それで、どうするつもりなんだ」

「……さあ。このまま暮らしていくんじゃないか」

「だったらそれでいいじゃないか」

「……相談しがない奴」

「俺に相談するつもりだったのか？ 俺の言うことを素直に聞くタマかよ、おまえが」
ラーヴリヤの口調は荒っぽかったが、下手にしんみりうなづかれるより慰められた気がした。

「とにかく俺は、飛行機に乗って家に帰る」

「ん。あ、エールフランスのリムジンに乗るのか？」

「そうだが」

「送るよ」

二人は陽光の中のポルト・マイヨーを横切った。気温は上がりそうだが、風は秋の匂いがした。

バスはすでにエアターミナルの前に止まっていた。

「じゃあ、気をつけて。今度はいつ来る？」

「一週間……十日後かな」ラヴレンティは軽く手を振り、バスの奥へ消えた。バスは間もなく発車した。

それを見送りながらルディアンは、まだ何かラヴレンティに言い忘れたことがあるような気がして、記憶の中をまさぐっていた。

八月 三

ラヴレンティは腕時計を見、ため息をついた。ポルト・マイヨーでルディアンと別れた

のが七時。七時半過ぎにシャルル・ドゴール空港に着き、アエロフロートのカウンターでチェック・インする。

実際に飛んでいる時間よりもはるかに多くの時間を、空港までの足と空港での手続きや待ち時間にかかるのが飛行機の最大の欠点だとラヴレンティは思っていた。仕事で外国に行くのは好きだったが、ソ連の交通機関で長旅をするのは好きではなかった。

八時三五分、^{デイク・オヴ}離陸。一昔前まで、アエロ

フロート一機につき少なくとも五人のKG

Bが載っているという小話^{アネキドット}があった。客に一人、客を尾行しているのが一人、乗務員に一人、コックピットに一人そして飛行機が無事に目的地に着くかどうか知らせるために貨物室に一人。今、自分が乗客として乗っているから、あと四人は乗っていてもおかしくない。

まあ、スパイと日本人観光客はどこでもいるものだ。この飛行機はモスクワ經由東京行きなので、日本人が多かった。

モスクワまで約四時間。時差が二時間あるからシエレメチエボ空港に着くのは午後二時二〇分。リボフ行きに乗り換えてさらに二時間。そしてリボフから汽車に一時間ほど乗って、ようやく母と妹のいる家にたどりつける。

やれやれと息を吐き、ラヴレンティは窓の外を見やった。

八月 四

ラヴレンティに会った後、ルディアンはE F F Oの寮でもう一度寝なおし、起きたのは午後を大分回ったところだった。身支度を整え、

インベリアル・ルーム
幹部会執務室に行く。

「おはよう、ルデイ。デルフィートは間もなく戻るわよ」

ルデイアンのでたらめな活動時間になれっことなっている幹部会事務局長のエリザベートは、とがめもせずに声をかけた。

「デルフィートの国連演説の日程は決まったのか？」

言いながらルデイアンは自分の机の上の書類をばらばらとめくる。

「ええ。九月一七日でほぼきまりそうよ。ニューヨークに入るのはその三日前から……」

「エリザベート！」

ルデイアンは強い口調で彼女の言葉をさえぎった。

「な、何？」

「この電報はいつ届いた？」

ルデイアンは机の上ののっていたうす青い電報票をかざしてみせた。

「え……確か、三〇分ぐらい前……」

それを聞くか聞かないかのうちにルデイアンは電話に飛びつくと、ソ連大使館を呼び出した。

八月 五

午後五時ごろ、ようやくラヴレンティはリボフ空港に着いた。遠くに雷鳴。昔、雷を怖がって泣く妹を荷台に乗せて、必死に自転車をこいで家に帰ったことがあった。家に着いたとたん大雨が降りだし、ほっとしたものもつかの間、雷が鳴っているときは地に伏せて待つよう、母親に叱られたのを思い出す。

東側の丘は雨が降っていたが、西の空は晴れていた。ラヴレンティはタクシーを拾って

駅に行き、列車に乗った。

あと一時間で乗り物とおさらばできる。ラヴレンティは座席には座らず、廊下に出て窓を開けた。

汽車はとろとろと動き始めた。動き始めはのろかったが、加速度的に速度をまし、一〇分とたたぬうちに全速力となった。風が勢いよく入ってくる。市街地はすぐに終わり、平原や麦畑、緑の地平線と薄い色の空が果てしなくつづく。遠くで雷がまた光ったが、こちら側では太陽は明るく輝いていた。ながらかな丘と森、そして河。

ラヴレンティの横を七〇歳ぐらいの老婦人が大きな荷物を引きずって行く。ラヴレンティは窓を閉めると、どこまで運ぶのか聞いた。彼女は一等車の奥を指さす。ラヴレンティは荷物を担ぎ、彼女の足に合わせてゆつくり座席まで歩いた。そして荷物から手をはなしたとき、ラヴレンティは数人の男に銃を突きつけられていた。

狭い廊下の前と後ろに二人づつ、逃れるのはほとんど不可能だった。ラヴレンティは手をあげ男たちが身振りですすままに、車両の端まで行く。

男の一人が車両のドアを開けた。勢いよく外の空気が流れこんでくる。

「どうするつもりだ」

手をあげたまま、ラヴレンティが聞いた。

「死んでもらう」

男は言い、ラヴレンティの背中に銃をつきつけた。外はなだらかな丘陵地帯。ドニエストル川の支流が線路を横切る。ほんの一瞬のすきをつき、ラヴレンティは下の川に飛び込んだ。

男たちはあわてて銃を撃った。列車の音にかき消される銃声。ラヴレンティは必死で岸へと泳ぐ。肩に一発当たり、激痛が走った。

そしてもう一発。気が遠くなる。気を失って

はならない。気を失う前にあの葦の茂みに入れば……。水の感触がふいに遠のく。

ちがう、まだ今じゃない。まだやることがたくさん残っている。まだ……。

ラヴレンティの脳裏にゴルバチョフと母と妹と、恋人と、最後にルディアンの顔が浮かんで消えた。

うつぶせになったラヴレンティの身体は血に染まり、赤い流れが川の水にまじり始める。

遠くで、雷鳴が鳴った。

(つづく)

——今回の主要参考文献——

ユーリ・シチェルバク著 松岡信夫訳

『チエルノブイリからの証言』『続・チエルノブイリからの証言』 技術と人間

ウラジミール・グーバレフ著 金光不二夫訳 『チエルノブイリの黙示録 石棺』 リヴェルタ出版

ヘンリー・ハンマン、スチュアート・パロット著 小笠原信之、青山明弘訳 『チエルノブイリのメイデー』 一光社

赤城昭夫 『チエルノブイリの放射能』 岩波ブックレット七四

フリデリック・ポール 山本楡美子訳 『チエルノブイリ』 講談社文庫